



『吾妻鏡』における武士表象：鎌倉幕府草創期を中心に（二〇二三年度修士論文要旨）

香取，千晴

(Citation)

國文論叢別冊, 2:15-16

(Issue Date)

2024-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491572>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491572>



『吾妻鏡』における武士表象

鎌倉幕府草創期を中心に――

香取 千晴

『吾妻鏡』は、鎌倉幕府の編纂した歴史書として知られており、当時の政治状況や幕府に仕えた武士の実態を知る上で重要な史料である。一方で、記録のような記事の合間に、特定の人物に焦点を当てた逸話が度々挿入されており、『吾妻鏡』の記述や記事の取捨選択には、編纂者の意図の存在が推測できる。そのような部分に注目して、『吾妻鏡』を文学作品として読む試みを行った。

第一章では『吾妻鏡』の文治五年奥州合戦記事と、そこに登場する人物たちの分析を行った。

第一節では奥州合戦の意義と『吾妻鏡』の記述の連関について検討した。奥州合戦は源頼朝が、前九年合戦で東北地方を平定した先祖・源頼義の先例を強く意識し、御家人たちにも過去の戦いを追体験させることで、頼朝の貴種性、武家の棟梁としての立場を知らしめる目的があった。しかし、奥州藤原氏の自律性や、被征服地域からの目線や声を感じられず、他の軍記物語と比較しての不足点も指摘した。

第二節では、奥州合戦記事に登場する鎌倉方武士の序列や登場場面を整理した。和田義盛や梶原景時のように、鎌倉幕府内の中心的な立場にふさわしく話題の多い者もあるが、北条氏（時政、政子、義時）のように合戦には登場せず、宗教的後方支援をする

ことで頼朝との近さを表している者もあった。その中で小山氏（小山政光とその子の小山三兄弟（朝政・宗政・朝光、政光甥の下河辺行平）と畠山重忠の記事の分量が他の武士よりも多く、目立っていることが明らかになった。

第三節以降では、奥州合戦で活躍の強調された小山氏と畠山重忠について、その要因を検討した。小山氏は平将門を討った依藤太秀郷の末裔であり、秀郷流の正当な武芸を受け継ぐものとして鎌倉幕府により規定されていた一族である。血筋の持つ「吉例」が、同族の奥州藤原氏を打ち負かし、奥州合戦の縁起担ぎになるように、小山氏の活躍を目立たせる意図が働いたのではないかと考えられる。畠山重忠は、前九年合戦で先祖（畠山武綱または重綱）が先陣となり戦勝したという「吉例」にならって先陣を勤めるという大きな役割を負っているが、一方で奥州合戦においては際立った戦功は挙げておらず、活躍できなかった部分を寛容、正直、清廉といった精神性で補おうとする作為が現れていた。そして、奥州合戦の捕虜への対応で、重忠の礼儀正しさに比べて梶原景時の無礼さを描いた記事があるが、これとよく似た構造の記事が『吾妻鏡』の他の箇所にもあり、ここでは小山朝光と景時の礼儀の問題が扱われていた。奥州合戦部分以外においても、重忠、小山氏、景時の関係に共通性のある記事が数か所見られ、人物たちに対する共通した意識を以て書かれたものと考えられる。

最終節の結論では、小山氏と重忠が特に活躍を強調されていた要因について、小山氏は藤原秀郷、畠山氏は平良文と、互いに鎮守府將軍を祖に持っていたところにあるとした。秀郷流、良文流の武士は彼ら以外にも数多くいるが、とりわけ小山氏は武芸の正

統を引き継いでいるという点、重忠は、前九年合戦時の祖先の「先陣」の伝統を持つ点、さらに互いに大武士団を率いる高い位置にいるという立場もあり、奥州合戦で活躍すべき人物として選ばれたと分析した。そして、奥州合戦記事内では接点のなかった重忠と小山氏は、奥州合戦記事外で「將軍の子孫」として登場し、編纂者の意図が無意識に現れる形で重忠や小山氏を善・景時を悪とする、この数人の間で組み合わされる話型があることも判明した。

第二章では、頼朝の寵臣であり、所領争いなどもで曾我兄弟に討たれたことで知られる鎌倉幕府の御家人・工藤祐経を分析対象とした。

第一節では先行研究を、第二節と第三節では『吾妻鏡』に登場する祐経の記事を分析し、その特徴を分析した。それらをまとめると、『吾妻鏡』における祐経の形象は、「在京経験があり、都の人脈や芸能の才を持つが、武勇には劣ること」「それにより御家人たちからの微妙な反発があること、かつ曾我兄弟に討たれる部分の記事にもそれが反映されていること」「頼朝に能力は気に入られるが、武力面では信頼されていないこと」「同じ伊豆の武士であり、頼朝の旗揚げ時から付き従い武勇に優れた御家人・天野遠景の存在により、祐経の武力不足と文化性がより強調されていること」が特徴であるとした。

第四節では、『吾妻鏡』以降の文学作品である『曾我物語』『義経記』を中心に祐経の描写の『吾妻鏡』との差異を比較した。『曾我物語』の祐経は、『吾妻鏡』での武勇がなく御家人たちからの反発があるという欠点はそのまま、教養や文化性の面が消え、個性

が失われ、狡猾で不遜な器の小さい敵役に矮小化されていた。一方『義経記』では、在京経験があるという特性を生かし、京育ちの妻に橋渡しをして静を懐柔し、鼓の達人として静の舞の伴奏を任される肯定的な役回りである。『吾妻鏡』に描かれた祐経の特徴のうち、御家人たちの反発感情と武力の欠如は『曾我物語』に、京の文化性を持つことは『義経記』に、より強調されて伝わったのではないかと分析した。

最終節の結論では、『吾妻鏡』の祐経の描写には「京への反発」が表れたものと想定した。関東の武士たちは、実際は幕府成立以前から京とつながりがあることが多く、鎌倉幕府は京の文化を重要視し、徐々に京の思想や秩序も取り入れていたが、一方でそのような幕府の姿勢への不満や京に対する反発感情も潜在的に流れており、都の教養や文化を身に着けながらも、御家人たちとは微妙に相いれず、結局狩場で殺されてしまうという『吾妻鏡』における祐経の形象は、そのような京に対する抵抗意識が顕在化したものではないだろうかと結論付けた。

以上、第一章では奥州合戦を中心に、小山氏と畠山重忠の描写を検討して、『吾妻鏡』に小山氏と畠山氏の「吉例」となる血筋と武士団の大きさという共通性による結びつきが構想されていることを分析し、第二章では工藤祐経の描写とその京文化の要素、そしてそれに対する御家人たちの反発の存在を指摘した。このように『吾妻鏡』に登場する人物に注目することで、『吾妻鏡』に無意識に現れている考え方や構想を炙り出すことができ、今後の『吾妻鏡』の文学研究につながるのではとの提案を行った。

(かとり ちはる)